

東日本支部だより

2012年3月1日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

**** 定例研究会のお知らせ ****

今後の例会予定

例年、3月と4月の定例研究会では、卒論・修論発表を行っています。今年度は、その2回に加えて、研究発表の例会も催します。例会開催日は、以下の通りです。開催時間・場所・内容などの詳細は、後掲の記事をご覧ください。どうぞ、ふるってご参加ください。

第62回 3月17日(土) 卒論・修論発表

第63回 4月7日(土) 卒論・修論発表

第64回 4月21日(土) 研究発表

※ホームページには、研究発表の要旨を掲載しています。併せてご参照ください。

◆東日本支部第62回定例研究会

時 2012年3月17日(土) 午後2時～5時

所 亜細亜大学 2号館 236教室

(JR中央線武蔵境駅北口から徒歩12分、または北口からムーバス「境西循環」「境・東小金井線」に乗り「亜細亜大学南門」下車)

○2011年度 卒業論文発表(その1)

1. 山田耕筰の歌曲における日本語の問題

太田 郁(東京芸術大学)

2. 本居長世の目指した音楽

—音楽活動と作品分析から見る「新音楽」の創造—

岡 皆実(東京芸術大学)

3. 鳴門の「第九」をめぐる音楽活動について

渡邊 愛子(お茶の水女子大学)

○2011年度 修士論文発表(その1)

4. 京劇《宇宙鋒》研究

—梅蘭芳の《宇宙鋒》構築と規範化—

品川 愛子(東京芸術大学大学院)

5. ミャンマー古典歌謡のジャンルとサウン・ガウの旋律型

ス・ザ・ザ・テ・イ(東京芸術大学大学院)

6. 舞楽の地方伝播 —富山県の舞楽を中心に—

角 優希(東京芸術大学大学院)

司会 配川美加(東京芸術大学)

◆東日本支部第63回定例研究会

時 2012年4月7日(土) 午後2時～5時

所 お茶の水女子大学 共通講義棟3号館 105号室

(地下鉄丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分)

*ご来校の際は身分証明書をお持ちの上、正門をご利用下さい。

○2011 年度 卒業論文発表(その2)

1. フェイルーズ初期の音楽にみるアラブの伝統と西洋の影響

酒井 絵美(東京芸術大学)

○2011 年度 修士論文発表(その2)

2. 地域における伝統芸能の伝承について
—愛知県三河地方のチャラボコを事例に—

市古 有希(お茶の水女子大学大学院)

3. 長唄の稽古文化の構造
—資料分析と聞き取り調査を通して—

鹿倉由衣(東京芸術大学大学院)

4. ドイツにおける日本伝統芸能の公演
—ハインツ=ディータ・レーゼ氏の活動を通して—

田辺 沙保里(お茶の水女子大学大学院)

5. 明治日本における楽器製作の認識と変容
—内国勸業博覧会と楽器—

佃 陽子(国立音楽大学大学院)

6. 徳川将軍家の追善儀礼と音楽
—江戸時代初期の日光東照宮年忌法会を事例として—

服部 阿裕未(東京芸術大学大学院)

司会 濱崎友絵(早稲田大学)

◆東日本支部第 64 回定例研究会

時 2012 年 4 月 21 日(土) 午後1時 30 分～4 時 50 分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

(JR 上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

○研究発表

1. Melodyne による声明の装飾音のインタラクティブな採譜
—その可能性と限界—

フベルトス・ドライヤー(日本大学)

近藤 静乃(東京芸術大学)

2. 無料動画配信サービスにおける世界音楽受容と発信
—南アジア音楽の事例—

小日向英俊(東京音楽大学)

3. 民謡を「伝統化」する時・しない時

米野みちよ(国立フィリピン大学)

司会 野川美穂子(東京芸術大学)

定例研究会発表募集 (7 月・12 月例会)

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800 字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、本誌末尾記載の東日本支部事務局あて、お申し込み下さい。7月7日例会での発表希望は4月20日、12月1日例会での発表希望は9月20日必着にてお願いいたします。なお、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

***** 定例研究会の報告 *****

◆東日本支部第 60 回定例研究会

時 2011 年 12 月 3 日(土) 午後 2 時～4 時

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

司会 鳥谷部輝彦(日本学術振興会特別研究員)

○報告

「伊福部昭の遺した明清楽器

—東京音楽大学民族音楽研究所寄託の明清楽器の
修理について—

報告者 甲田潤(東京音楽大学民族音楽研究所

専任研究員、非学会員)

稲見恵七(明清楽研究者、非学会員)

(発表要旨の整理・鳥谷部輝彦)

甲田の報告では、(1)伊福部昭氏の収集した明清楽の楽器楽譜が東京音楽大学へ寄贈された経緯、(2)伊福部氏が映画音楽の中で明清楽を使ったこと、を述べた。(1)伊福部氏は 1974 年に東京音楽大学作曲科教授に就任し、76 年には学長に就任した。民族音楽研究所は当初は作曲研究室の中に設けられており、80 年頃にはヨーロッパやインドなどの楽器を収集していた。その後、大学院設置に向けて研究施設の充実を図るため、91 年に当所を校舎からやや離れて独立した場所へ移した。その際に所内の充実を図るため伊福部氏の指示の下で資料と楽器を集めたが、その中に伊福部氏の個人蔵である明清楽の楽器と楽譜が含まれていた。それらの明清楽の品は、当所に仮に預け置く、という形で持ち込まれた。それらの品は当所では使用せず、保管・管理に努めてきたが、修理が必要な状態であった。その後、稲見氏が当所を訪れたこと、およびご親族の伊福部

玲子氏から寄贈の認を受けたことを契機に、それらの楽器を修理し活用する(実際に演奏する)という方針を固め、現在はその修理の途中である(なお、伊福部昭氏は 2006 年に逝去された)。また、楽器は当所で活用することを広く知らしめるため、先日(11 月 29 日)東京音楽大学で公開講座を開き、2012 年 6 月より「月琴」講座を開講する予定である。

(2)映画音楽では、最初に『アナタハン』(1953 年)に明清楽器を用いた後、『日本誕生』(1959 年)でヨーロッパの楽器などと共に雲羅と金羅を使い、『ゴジラ対モスラ』(1992 年)でも使っている(例会では後二者の映像と自筆スコアのコピーをお見せした)。

なお、ご来場くださった伊福部玲子氏には、京都で買い付けたこと、楽器を日常生活で身近に置いていた様子、楽譜は東京音楽大付属学図書館で公開するように進めていること、などをお話しいただいた。

稲見の報告では、(3)伊福部氏の楽器に関わるようになった経緯、(4)伊福部氏の楽器を元々所持していた京都の「招月園」という団体について、(5)楽器の現状と他收藏品(東京芸大蔵など)との比較および修理法、を述べた。(3)稲見は兼ねてから沖縄の御座楽の楽器を復元していたところ、伊福部氏の「明清楽器分疏」を読み、御座楽の楽器(胡琴フウキン、三線サンスエン)と伊福部氏の明清楽器(四胡、三弦子)の類似性に興味を持ち、伊福部玲子氏に会うこととなった。楽器を見たところ、膠が劣化し部材がはがれるなどしていた。それらの楽器は展示するだけでなく、実際に演奏できるようにしたいという玲子氏の意向を受けた。今後は楽器の知識を持つ者が、それらの楽器を常に検査し維持する必要がある。

(4)伊福部氏の楽器一式の中に、京都の「招月園」が制作した演奏会のチラシや曲目、会則、招月園銘の清笛箱などがあるため、その一式は招月園がかつて所有していた楽

器と楽譜であると考えられる。招月園について従来知られていたことは、『音楽雑誌』20号に載る追福雅会(平井連山七周年忌、明治25年5月8日)の記事と、その記事を表に入れた塚原康子氏の『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』(601頁)のみであった。稲見の調査では『西京人物志』(明治12年)と『京都各所案内図会』(明治14年、20年)の「月琴」項に「招月園女史」と書かれる人物がいることが判明した。

(5)【琵琶】は水をかぶったようで、膠が緩み、部材が取れていたり、布がくっついている部分もある。覆手は水龍がデザインされるため、高度な技巧が施されたと考えられる。胴の膠が取れたため内部を見たところ、螺旋状の響線が1本設置してあった(「明清楽器分疏」には3本と書かれる。普通は1本の焼入れをした鉄線の片方を側板に固定して響線として設置されているため、単調な響きになる。伊福部氏は、普通の響線とは違う鳴り方なので、複数の鉄線が入っているものと考えたのであろう)。また、糸倉と鹿頸の結合箇所にも木製ピンを打ち付けている。【月琴】の表面には撥皮はなく、白楽天の「琵琶行」が書かれる。東京芸術大学の魏氏楽器の中の月琴には古くて上等の品があるが、撥皮がなく、柱間の装飾もなく、普及型のように思える。【胡琴や携琴など】の千金はとれ、弓の毛は痛んでいたので取り替えた。【片鼓】は皮面の全ての箇所を叩いても音が出るようになっていて(一般的な板鼓は頂上付近の狭い範囲しか音が出ない)。

(報告・塚原康子)

作曲家の故伊福部昭氏旧蔵の明清楽器(以下、伊福部楽器)は、かねてより東京音楽大学民族音楽研究所に寄託されていたが、本年それが御遺族から正式に寄贈されたことを受けて今回の報告が企画されたという。

最初に甲田潤氏より、伊福部楽器の収蔵経緯等について説明があった。寄託の時点ですでに琵琶などは傷んでおり演奏できる状態になかったこと、御遺族からの「(音を鳴らして)使ってほしい」との意向を受けて順次修理を進めていること、伊福部昭氏は1953年の映画「あなたはん」での使用を皮切りに、1959年の「日本誕生」(岩戸神楽の場面の映像が流された)、1962年の「ゴジラ対モスラ」等に雲羅などの明清楽器を使用していたことがスコアや映像から確認できること、が紹介された。つづいて、例会に来会された御遺族の伊福部玲子氏より、明清楽器は昭氏が戦後に映画の仕事で京都滞在中に骨董店で見つけたもので、映画の仕事を一本終えるごとに一点ずつ購入し自ら東京まで抱えて運んだこと、楽器は自室に置き、膠で修理しながらよく弾き親しんでいたこと、など御身内ならではのエピソードを披露された。

その後、楽器の修理にあたっている稲見恵七氏より、伊福部楽器は、明治10年代から京都で活躍した女流清楽家・招月園の旧蔵品で、ほぼ国産楽器であることが示された。清楽器は流行した明治期に国産楽器が大量に作られ遺品も多いのだが、旧蔵者が明らかな品は少なく貴重である。楽器の他に、合奏会の案内チラシと封筒、手書きの楽譜(工尺譜)や歌詞、曲目表も残り、相当のレパートリーをもっていたことを窺わせる。伊福部楽器のうち、琵琶・月琴・阮咸・木琴・清笛を会場に運び、実物を見せながら原状や修理過程を詳しく解説したのは効果的で、楽器という資料のもつ情報量の大きさを改めて認識させた。ただし、比較のために稲見氏所蔵の清楽器も数点一緒に持参したことは、一言説明した方がよかっただろう。久々の資料報告が国内外での明清楽への関心と研究の活性化に資することを祈念する。

◆東日本支部第 61 回定例研究会

時 2012 年 2 月 4 日(土)午後 2 時～4 時 50 分

所 有明教育芸術短期大学 301 教室

司会 野川美穂子(東京芸術大学)

○特別企画

1. 東洋音楽学会における民俗音楽調査について

小島美子(国立歴史民俗博物館)

(発表要旨)

東洋音楽学会は九学会連合(日本民族学会、日本社会学会など九学会の連合組織)の下北半島の総合調査に 1963 年に特別参加し、翌 1964 年より正式に参加した。これが東洋音楽学会としての最初の民俗音楽調査で、その後は東洋音楽学会独自の調査も行われるようになった。

I. 九学会連合における調査

「下北半島の自然・社会・文化に関する総合研究」(1963～64)、「利根川流域の自然・社会・文化に関する総合研究」(1966～68)、「沖縄の自然・社会・文化に関する総合研究」(1970～73)、「奄美の自然・社会・文化に関する総合研究」(1975～79)

II. 東洋音楽学会独自の調査

「下北半島の民俗音楽」(1964)、九学会連合の下北調査と関連して調査し、日本コロムビアから LP「日本の郷土芸能—下北半島をたずねて」を出す。これはシリーズ化される予定で日本コロムビアはその後の調査にも財政援助されたが、レコード化されたのは「北海道渡島半島の民謡と民俗芸能」のみである。

「渡島半島の民俗音楽」(1966)、「奥能登の民俗音楽」(1967)、「土佐の民俗音楽」(1968)、「薩摩半島の民俗音楽」(1969)、「奥飛騨の民俗音楽」(1970)、「伊勢志摩の民俗音楽」(1972 関西支部)、他に東洋音楽学会が後援した五大学有志による「五島列島の民俗音楽」の調査がある。

これらの調査の録音テープ、メモ、写真などは、一部を除き、国立民族学博物館に寄贈された。その手続きに関して調査者たちに一切の相談がなかったことは、調査や調査資料の扱い方について、今後検討されるべきであろう。

この例会では民俗音楽の調査研究方法の展開についても報告した。町田佳聲氏の時代の、個々の民謡の収集と記録。同じ民謡も数多く集め比較譜によって、個々の民謡は多く Variante の一つの形であることを示した小泉文夫氏の指導による方法。一定地域の全年令層の歌を収集、分析し、その地域の音楽的性格を明らかにする小泉文夫氏の指導による方法。

その他九学会連合の調査の過程では、比較譜によって民俗芸能の伝播の過程を明らかにする方法、自然や社会の条件を考慮して民俗音楽の性格を明らかにする方法など、多くの展開があった。

2. 国立民族学博物館所蔵「東洋音楽学会調査記録」資料の現状と活用について

福岡正太(国立民族学博物館)

(発表要旨)

国立民族学博物館(民博)が所蔵する「東洋音楽学会調査記録」資料は、1995 年に学会から民博に寄贈された。1960 年代から 70 年代にかけて学会が主体となって行なった日本各地の民俗音楽調査の録音テープ 1036 本(内訳は表参照)、および付随する調査カードや記録写真等を含んでいる。現在、資料の中心をなすテープは、保存および利用のために DAT と CD に複製されている。オリジナルテープは、温度 18℃、湿度 45%に管理された収蔵庫で保管しているが、「ビネガーシンドローム」症状がかなり進行している 443 本のテープは、他の資料に悪影響を及ぼすため別置している。付随する調査カードは、原則として、調査ごとに決

められた様式を用いて、収録した曲ごとに作成されている。民博では、現地で収集された種々の紙資料や採譜とともに、収録曲ごとに中性紙のフォルダーに挟み、紙製の保管箱に収納している。調査カード等は、利用のためのコピーが作成されている。写真資料については、学会から寄贈された状態のまま保管している。これらの資料の利用については、民博の民族学資料共同利用窓口で問い合わせを受け付けている。演唱者・調査協力者等の個人情報や権利などに配慮した上で、館内で資料の閲覧や試聴をすることができる。日本の民俗音楽研究史を跡付ける貴重な資料で、調査時の記録もきちんと残されており、今後、学会関係者等を中心として、この資料を利用した研究が進められることが望ましい。ちなみに、民博の共同研究の課題区分の1つに、民博所蔵資料についての研究があげられており、こうした制度を利用することも可能である。

調査記録録音テープ(オープンリールおよびカセットテープ)内訳

調査名	調査年	テープ本数
下北半島調査(九学会)	1963-1965	258(6)
五島列島民俗音楽調査	1964	2
渡島半島民俗芸能調査	1966	35
利根川調査(九学会)	1966-1969	267(30)
奥能登民俗音楽調査	1967	21
薩摩半島民俗音楽調査	1969	105(1)
土佐民俗音楽調査	1968	96(2)
飛騨民俗音楽調査	1970	55
沖縄調査(九学会)	1971-1973	168(4)
奄美調査(九学会)	1975-1977	30
	合計	1036(43)

民博「音響資料目録データベース」により集計。

()内の数字は、未録音テープの数(内数)

(報告・入江宣子) *特別企画1 および2の報告

かれこれ 40 数年前の学会調査がテーマという今回の例会の報告執筆依頼を受けた時、思わず自分の年齢と依頼電話の若々しい声とを比較してしまった。私が学会民俗音楽調査に毎夏参加し、並行して九学会利根川調査に関わっていたのは、丁度今の若い参事さんたちと同年代頃かと思う。のちに福井県に住んでいた時、九学会テーマ別総合調査「日本の沿岸文化」に参加の樋口昭氏から声を掛けていただき、若狭での私的調査を報告書に生かすことが出来た。これらフィールドワークの蓄積は私の貴重な財産となっている。

一方、民博にテープが移管されると決まった時は、倉庫の棚に押し込まれたままになるのではないかと半分諦めの気分であった。ところが今回福岡さんの報告を聞いてびっくりした。こんなにも丁寧に整理され、保存用DATまで作成されていたのである。質疑の時間に薦田治子さんが、とても個人ではできない整理作業が行なわれているのを見て感激したと述べておられるから、今迄この作業に関して学会では報告がされていなかったようである。民博からは目録情報のみウェブ上のデータベースで公開されているそうだ。

今回は薦田さんの薩摩琵琶資料確認がきっかけで、例会報告につながったという。これだけの調査がなされ、かつ整理がされているのに、そのことがほとんど知られていなかったことは大変残念なことであった。今後は活用に向けての内容精査やデータ作成作業が次の課題となってくる。学会財産として次世代へ引継ぐために、新たな機運が盛り上がってくれば嬉しい。自分の乱筆乱文の採集メモが日の目を見るのは怖いけれど。

○研究発表

3. カトマンズ盆地におけるダファー音楽の構造と伝承 サワン・ジョシ(東京芸術大学)

(発表要旨)

本研究ではネパール中世(13~18世紀)マッラ王朝時代に発展し現在も伝承されているダファー(Dapha)音楽の音楽構造と伝承形態について分析するものである。

ダファー音楽は現在ネパール・カトマンズ盆地のネワール族の社会において、ネワール人男性集団 *Dāphā Khala* によって伝承されている賛歌スタイルの伝統的な音楽である。ヒンドゥー教と仏教の寺院の前で神々の歌を賛歌スタイルで歌うのでダファー音楽のことをダファー・バジャン Dapha Bhajan とも呼ぶ。これは実は、中世ネワールのマッラ王の宮廷文化で生まれたもので、当時の祈祷の文学と音楽理論に対する貴族社会の関心を反映している。ダファーの曲は神々や王に対する感謝を込めたサンスクリット語、古いネワール語による詩からなり、マイティリー語を使って作詩したものも含まれている。ネワール族は中世からインドの影響を受け、独自のカースト制度を持つ。その中で現在ダファーの演奏集団はカトマンズ盆地のカトマンズ市、パタン市(ラトリプル市)とバクタプル市のネワール町のいくつかの農民と仏教徒の居住地を中心として、それぞれの地域ごとの約束と競争心によって育まれてきている。

ダファー音楽は、キンという大型の両面太鼓、ターという打ち合わせる鐘、チャリという小型シンバルを伴奏に、歌い手が二手に分かれて神や王への感謝、祈りを交互に唄い上げていくものである。このような演奏はカトマンズ盆地の年中行事などに際して、近くの街区周辺の仏教寺院とヒンドゥー寺院の両方で行われる。このことは中世以来、ネパールにおいて仏教とヒンドゥー教が相互に結びつきを保っていることを反映しており、ダファー音楽は宗教を超えてネパ

ールを社会的にまとめる役割も果たしている。

音楽の構造はターラ(リズム)とラーガ(旋律組成)からなる点で、インド古典音楽と共通の理論的基盤を持つ。音楽を神へ捧げるプロセスには、導入部、賛歌、アーラティという三段階があり、皆で神の功德を頂く曲、終了の部などいわゆる法要と同じように供養の式を執り行うように歌う。このようにダファーは、祝祭的、芸術的、宗教的な要素が混ざり合った音楽でもある。

(報告)

*本発表への報告は次号の支部だよりに掲載いたします。

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2012年6月4日 (6月中旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152、E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数と書式: 25字×8行以内(投稿者名を明記のこと)

4. 内容: 会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきます。ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

編集後記

今回は、12月例会と2月例会のご報告を中心にお送りします。12月例会では、東京音楽大学民族音楽研究所の明清楽器について、2月例会では特別企画として東洋音楽学会の民俗音楽調査について、また当資料の国立民族学博物館での保存状況について、ご報告を頂きました。会員のみなさまにこれらの資料をご活用頂ける契機となれば、と思います。

東日本支部では今後も例会活動を活発にしたいと考えておりますので、研究発表や企画など皆さまからのお申し込みをお待ちしています。本誌での「会員の声」欄もぜひご活用ください。(Y)

発行：(社)東洋音楽学会東日本支部

編集：野川美穂子、茂手木潔子、早稲田みな子、

鳥谷部輝彦、福田千絵、山下正美

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com
